



伊東市小室山より伊豆大島を望む

見果てぬ幻を追い求めて

(教会将来計画への参画・祈りと献金のお願い)



私たち（伊東教会）は創立 117 年目を迎え、この地において「伊豆伝道の灯を消さない」を合言葉に福音を伝える役割を担って参りました。愛着が絶えることのない皆様の教会が、今新たな段階にさしかかろうとしています。

2023 年 7 月 20 日

日本基督教団 **伊東教会**
教会役員会・将来計画委員会

教会将来計画のルーツとは

名伯楽・松本廣牧師は、伊東教会を「マケドニア教会」と呼び、伝道の幻をパウロと分かち合う姿と教会とを重ね合わせました。戦後になって「同盟」系の教会が日本基督教団を離脱する中で、「教団には『同盟の精神』がなければならない」と残留を決断、マケドニア会としての交わりを現在に残しています。文書伝道に強みを持つ集団です。2005年、「移転か、



隣接地の取得か、そのいずれかが教会存続の道である」と内田知牧師が喝破した際の真意は、伝道の精神こそが存続してほしい、ということにありました。教会組織の存続ではなく、共同体の精神こそが、私たちが継承すべきものです。

ピンチはチャンス

2020年の世界的感染症の勃発は、教会にとって曲がり角となるはずでした。たまたま取得していた隣接地（反対側は公園）が、「窓を開けての礼拝」を可能としました。たまたま空調と換気の両立を可能にするノウハウを知っている教会員がいました。たまたまその前年・前々年に受洗ラッシュがあり、礼拝者の姿勢は崩れませんでした。戦時中礼拝を休まない姿を目撃していた人が今回も礼拝堂の最前列でたまたま礼拝を守り続けたのです。聖餐を休まない環境もたまたま整っていました。これら「たまたま」を主の摂理と信じ、「たまたま」の向こうにある主の志の実現を目指します。

教会将来計画 献金への呼びかけ



支出予定

設備補修・空調などの先行工事	150万円	
外壁改修・屋根補修	1,500万円	
内装	200万円	合計 1,850万円

収入

自己資金（教会債含む）	1,300万円	
献金目標（外部含む）	550万円	合計 1,850万円

献金は封筒に入れて直接お捧げくださるか、郵便振替口座（00100-1-14206）以外に、スルガ銀行、クレジットカードによる入金方法があります。詳しくは教会HPの特設ページをご覧ください。

教会将来計画への意義

牧師:山道さんは、「コロナが教会の行く道筋をはっきりさせた」、と教会役員会の祈りの中でおっしゃったことがありますね。

山道:それぞれの方に信仰の成長のプロセスというものがある、私にとってはそうだった、ということかも知れません。礼拝以外は出来なくなりました。でも礼拝を休まない限り、教会は存続し続けると分かったのです。そこで御言葉が聞かれ続け、また顔と顔を見合わせての交わりが続けられているからです。

牧師:牧師不足の顕在化など、この数年で諸教会の様子が一変した感があります。

山道:質的な変化も起こっているのではないのでしょうか。牧師がよく「次の次の牧師を探すのは教会(役員自身だ)とおっしゃっていて、「そんなの無理でしょ」と以前は思っていたものでした。当時とは、隔世の感さえあります。その中で「若い夫妻教職を育てながら自らも育つ」というビジョンは、大きな指針となります。

牧師:昨今の卒業後の牧師が育つ環境が整いにくいのは、教会が「守り」に入らざるをえない状況があるからなのかも知れません。

山道:これから、私たちのような地方の中小教会は、どう「攻め」の姿勢を保っていったら良いのでしょうか。

牧師:信仰の成長を考える際、教勢や献金額などの「見える」基準に偏りすぎている気がします。教會的な信仰の成長は、質的な部分も大きいのです。それを測る視点が欠かせません。先ほどの、説教聴聞と信仰的な交わりの重視、さらに聖書を読み、祈り、証しの言葉を見出す生活、そんなことを思います。

山道:この3年間に与えられたものを思い起こします。コロナを「恵みの期間」と教区に報告した教会があると聞きます。分かる気がします。そういったことへの感謝を、「将来計画への感謝」として表していければいいな、と感じています。



伊東市と教会 市民向けパンフより抜粋

濱田:現在教会で役員をやらせて頂いております、濱田献と申します。父がこの教会で牧師をしておりましたときに、教会は改築を致しまして、今の建物になりました。私で言うと小学生の頃です。

牧師:ずいぶんと人が増えていた時期ですね。現在は市内にもう一つ教会が生まれ※、どこもこぢんまりとしています。

濱田:中学生の頃までは、子どもが他で遊ぶところが少なかったのか、教会には人が来ていて教会学校も盛んでした。

牧師:町で「教会に行ったことがある」という方は多いですね。

濱田:その分、血の気も多かったというか…(笑)

牧師:地元志向の強い教会だと思います。

濱田:筋金入りですね。古い話ですが、昭和33年の狩野川台風では市内が壊滅的な打撃を受け、教会の礼拝堂もしばらく使い物にならないほどでしたが、災害救助のため牧師や信徒が方々を駆け巡り、衣類や食事の配給所としても機能したと聞いています。私はまだ生まれてない頃なのですが、古くからおられる教会員にいろいろ当時の思い出をうかがいました。教会を介して歴史を振り返りました。

牧師:市内で初めての幼稚園は、伊東教会の設立と聞きます。

濱田:キリスト教には、時代を先取りする意識があると思います。今教会が取り組んでいる「教会将来計画」は、教会自身の存続に留まらず、地域共生のあり方を打ち出すものになるのでは、と考えています。

* * *

※伊豆高原教会。市内には他に宇佐美教会を合わせいくつかのキリスト教会があります

私はなぜ伊東に移ったか ——あるキリスト者の判断

増井: 私は以前から伊東に別荘（マンション）を構えていましたが、本格的に住むようになったのは5年ほど前からです。海と山が近くにあり、温暖な気候が気に入っています。空気と水がおいしくて、温泉巡りも楽しめる…。リタイア前から目をつけていた場所だったんです。

牧師: 東京、その前は鎌倉にお住まいだったんですね。

増井: 生まれと育ちも東京です。勤務地が横浜から埼玉と変わったので、現役時代に何度か引越を経験しました。若いときに教会で洗礼を受け、「長老」の職を引き受けていた時期もあります。

牧師: 首都圏の名だたる大教会とは、色々違いもあるでしょう。

増井: 伊東は先に述べたように移住の際の有力な候補地でした。一方、よく人から言われるのが「津波や地震は大丈夫なの」というものです。実は地表プレートや湾の構造からしてそれほど心配は無い、と答えています。

牧師: 文化的にはどうですか。

増井: 本当は自分の専門をカバーする図書館がほしいです。ただこれは大学がないと無理なので、諦めました。でも諦めたくなかったのが教会のことなんです。一部の地方の教会にありがちな、「二流でいい」という態度がなく、「一流の教会を目指す」という所に好感を持ちます。

牧師: ささやかに「目指す」ことを続けたいと思います。ただ、教会は、むしろ地方でこそ実力を問われる場面があります。例えば葬儀の時、「仏教の方がいいのに」と思っている人たちもいる中で、「キリスト教ならではの慰め」を説教する。真剣に聞くご遺族の姿が励ましになります。ここに来て多くのことを学びました。

増井: 牧師に留学経験（韓国・ドイツ）があって現地のことが聞けたり、教会員の地域活動も施設における文化ボランティアとか外国人援助など、教会ならではの特色が良く出ていると思います。もちろん、教会そのものはまだ発展の余地があるのかも知れませんが、私の専門というか関心に近いところでいえば、例えば建物の色使いです。今回の「教会将来計画」が色々な側面での気づきにつながることを期待しています。皆さんで話し合いながら将来について考えてみるのは、なかなか心躍ることではないでしょうか。



日本基督教団 **伊東教会**

牧師 上田 彰 上田 文

〒414-0011 伊東市松川町 5-6

TEL&FAX 0557-37-5248

<https://itokyokai.jimdofree.com/>

メール itokyokai1907@gmail.com

